

詩篇77篇10-12節 「変わる右の手」

1A 慰めを拒む魂

2A 神の力ある手

1B 引き抜き、植える御手

2B 第二のエジプト

3B 主にある喜び勇み

本文

詩篇 77 篇を開いてください、午後礼拝では 75-78 篇までを一節ずつ読みますが、今朝は 77 篇 10-12 節に注目したいと思います。

10 そのとき私は言った。「私の弱いのはいと高き方の右の手が変わったことによる。」11 私は、主のみわざを思い起こそう。まことに、昔からのあなたの奇しいわざを思い起こそう。12 私は、あなたのなさったすべてのことに思いを巡らし、あなたのみわざを、静かに考えよう。

77 篇は、バビロン捕囚の中にいるアサフの子孫の詩篇だと思われます。ユダの国がバビロンによって滅ぼされました。エルサレムの神殿を破壊し、多くの者を今の、イラク南部、バビロンに捕え移しました。そして、神殿において礼拝賛美を導いていたアサフの子孫が、神が以前のように働いてくださっておられないことを嘆いています。これだけ神を求めている、神は自分たちの願いを聞いてくださらないではないか、という打ちひしがれた思いに浸っています。

1A 慰めを拒む魂

私たちには、時に悲劇が訪れます。これこそが主の御心であると信じて行なっていたことが、失われてしまうことがあります。そして、どんなに祈っても状況が何ら変わることがないことがあります。そのような時に私たちの心は沈みこむのです。77 篇 2 節以降を読みますと、彼は寝床に入ってもその悲しみに眠ることもできず、寝床から手を上げて主に祈っていました。けれども、答えは返ってきません。ついに、彼は自分の魂は慰めを拒んだと言っています。これはすっかり、落ち込んだ状態、鬱的になった状態です。そして、神のことを思い起こしては、今の状況とあまりにも格差があるので、神のことを思い出すたびに、霊が衰え果てています。4 節を見ますと、ついに、その悲しみを表現することさえ拒み、物を言わなくなってしまうました。そして、主がもう愛しておられないのではないか、主の恵みは永久に断たれたのか、約束は果たされないのではないか、神はいつくしみを忘れたのではないか、と嘆いています。

しかし、そこでこのように弱められてしまっているのは、主がおられないからではなく、主の御手が変わったからではないかと悟りました。それから彼は、主がおられないからではなく、主がおら

れるからこのようになっているのだ、ということが分かり、それでこれから主が、今まで自分が思っていた方法とは異なるけれども、益となるように事を行ってくださるだろうと希望を持つのです。

私たちの中に、こうした出来事がないでしょうか？これこそが、主によって与えられている思いだと確信しています。しかし、それがかなわないばかりか、反対に見えることが起こります。それで落胆してしまいます。思い出すのは、使徒パウロです。あれだけ数多くの奇蹟の業を、彼は聖霊によって行っていましたが、彼の人生にも夜がありました。パウロは熱心なユダヤ教徒でした。キリスト者を迫害するほどでした。その彼が回心しました。ですから、エルサレムにいる同じように熱心に宗教を信じるユダヤ人の気持ちが、痛いほど分かります。それで彼はずっと、エルサレムで福音を語ることを決めていたのです。ところが、結果は散々でした。ユダヤ人は聞いてきれましたが、パウロが主イエスから異邦人に遣わされると語られたことを言及した時に、周りが騒ぎ出し、それで彼はローマの千人隊長によって引っ張り出されて、保護されたのです。これから、カイザリヤにある牢屋でしばらくの間過ごすことになります。

しかし、夜に主がパウロのそばに立っておられました。そして、こう言われたのです。「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしななければならない。(使徒 23:11)」使徒パウロが最も落ち込んだ時だったでしょう。まさに、この詩篇の著者と同じように彼の霊は衰えていたに違いありません。自分を責めたかもしれません。「あそこで、異邦人という言葉を使いさえしなければ…」と非常に悔いていたかもしれません。けれどもイエス様は、エルサレムでの証しを決してその欠けを咎めたりせず、むしろエルサレムで証したように、といて肯定されたのです。むしろ、さらに同じようにローマでも証ししなければいけないと励まし、彼をさらに用いようとされていました。そして、ローマに囚人のままでパウロは連れて行かれますが、このことによって使徒の働きは、イエス様の言葉、「地の果てにまでわたしの証人となるのです。」という言葉が成就するのです。パウロにとって、最も暗かった時、自分が主の御心を行っていると信じて全くそうになっていなかった時、そこには神の右の手が働いていて、彼をしっかりと支えており、確実に導いてくださっていたのです。

2A 神の力ある手

神は右の手で私たちを導いておられます。右の手とは、力ある手、権威を持っている手です。神はご自分の主権によって、私たちを動かしておられます。

1B 引き抜き、植える御手

再び詩篇 77 篇の時代背景に戻りますが、どんなに神に嘆いても、神はその状況を変えたりされないという現実にはぶつかっていました。そこには、神の深い御旨がありました。神は、ユダの地にいる者たちを引き抜くという強い御心を持っておられたのです。主が預言者エレミヤを呼び出された時に、彼のすることをこう言われました。「見よ。わたしは、きょう、あなたを諸国の民と王国の上任命し、あるいは引き抜き、あるいは引き倒し、あるいは滅ぼし、あるいはこわし、あるいは建て、

また植えさせる。(エレミヤ 1:10)「ユダの国は、罪の深みの中にいました。その罪はまるで豹がその斑点を変えることができないように(エレミヤ 13:23)、彼らの心に沁みついてしまいました。それで神は、彼らが、ご自身が植えられた約束の地から引き抜くことを決められました。けれども、それは彼らを永遠に滅ぼすためではありません。むしろ、新しく植えるために引き抜くのです。新しい世代のユダヤ人が約束の地に帰還して、今度は主から離れない一つ心になって、エルサレムで礼拝するように願っておられたのでした。

しかし、この神の御心は、受け入れるのがとても難しいです。エレミヤはユダの民を愛していました。彼らが滅びることを決して願っていませんでした。実はそのことも、神の心を表していました。神は彼らを引き抜くことをよしとされていたわけではありません。むしろ、悲しんでおられました。しかし、新しい御霊の働きを行わない限り、彼らは立ち返ることができないことを知っておられました。けれどもエレミヤは祈ります。その度に神は拒まれます。こう言われました。「あなたは、この民のために祈ってはならない。彼らのために叫んだり、祈りをさげたりしてはならない。彼らがわざわざいに会ってわたしを呼ぶときにも、わたしは聞かないからだ。(エレミヤ 11:14)」

エレミヤは必死で祈りました。「14:19-22 あなたはユダを全く退けたのですか。あなたはシオンをきらわれたのですか。なぜ、あなたは、私たちを打って、いやされないのですか。私たちが平安を待ち望んでも、幸いはなく、癒しの時を待ち望んでも、なんと、恐怖しかありません。主よ。私たちは自分たちの悪と、先祖の咎とを知っています。ほんとうに私たちは、あなたに罪を犯しています。御名のために、私たちを退けないでください。あなたの栄光の御座をはずかしめないでください。あなたが私たちに立てられた契約を覚えて、それを破らないでください。異国のむなしい神々の中で、大雨を降らせる者がいるでしょうか。それとも、天が夕立を降らせるでしょうか。私たちの神、主よ。それは、あなたではありませんか。私たちがあなたを待ち望みます。あなたがこれらすべてをなさるからです。」これから、バビロンがユダの国を占領します。そしてシオン、エルサレムを荒らします。そんなことをあなたがされて、宜しいのですか？と主に求めているのですが、やはり主は言われます。「15:1 たといモーセとサムエルがわたしの前に立っても、わたしはこの民を顧みない。彼らをわたしの前から追い出し、立ち去らせよ。」どんなに優れた、祈りの執り成し手であっても、主は絶対に祈りを聞かないと言われるのです。

これこそ、私たちを落ち込ませる答えはありません。こちらがどんなに祈っても、決して肉の欲望や快樂に従った祈りでないのに、敬虔になかった祈りなのに、それを聞かれないというのはどういうことなのか。けれども、主は右の手を変えられていたのです。バビロンに彼らを捕え移して、七十年後に彼らを連れ戻すことを考えられていたのです。「29:10 バビロンに七十年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。」神はこの幸いな約束を果たそうとしておられたので、エレミヤの祈りを聞かれなかったのです。このように、通常ならば主の御心としているものが、その主権の中で変えられているということとはあり得るのです。そして、それは幸いのためであります。意地悪をするためではなく、私たちの

理解を超えているのですが、幸いのために変えておられるのです。

2B 第二のエジプト

使徒ペテロは、第一の手紙で「5:6 ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。」私たちは神の御手の中に自分を置く必要があります。すべてのことは主から来ていること、たとえそれが理解できないものであっても、主から来ているものであることを受け入れる必要があります。詩篇の著者、アサフの子孫は、そのことを思いました。「いと高き方の右の手が変わった」と言っています。

そこで彼は、自分が弱くされているその場所において、主が新たなことをしてくださると期待したのです。「11 私は、主のみわざを思い起こそう。まことに、昔からのあなたの奇しいわざを思い起こそう。12 私は、あなたのなされたすべてのことに思いを巡らし、あなたのみわざを、静かに考えよう。」と言っています。彼は、イスラエルの民がエジプトから脱出して、分かれた紅海の中を通ったことを思い出すのです。その時も、まさにイスラエルの民は次に何が起こるのか、全く想像できませんでした。イスラエルの民が、むしろ海辺で宿営するように命じられ、そこにエジプト軍が来て、逃げ場がなくなったのです。けれども、そこに行かなければ、彼らは次の道、すなわち自分たちが海を渡って救われ、敵どもが海の中で滅ぶのを見ることはありませんでした。

そこで、詩篇の著者は思ったのです。今でも、そうかもしれない。弱くされているけれども、むしろ神がその弱さからご自身の力を現してくださるのではないか、と思ったのです。このようにして、自分の思いとは異なる形で、神は彼に祈りの答えを与えてくださいました。事実エレミヤ書には、バビロンからの帰還が、第二の出エジプトとして描かれています。「16:14-15 それゆえ、見よ、その日が来る。…主の御告げ。…その日にはもはや、『イスラエルの子らをエジプトの国から上らせた主は生きておられる。』とは言わないで、ただ『イスラエルの子らを北の国や、彼らの散らされたすべての地方から上らせた主は生きておられる。』と言うようになる。わたしは彼らの先祖に与えた彼らの土地に彼らを帰らせる。」私たちは、一つの戸が閉じられたら、次に戸が開かれていることを信じることができます。先のもが見えないので、私たちは閉じられたところだけを見て、ああこれでもう終わりだと思ってしまう。けれども、実はそれこそが新しい始まりなのです。

3B 主にある喜び勇み

ですから、私たちは閉じられているように見える時においても、なおのこと主にあって喜ぶことができます。同じように、信仰の試されたハバククがいます。彼は、ユダが不正と不義の中にいるので、神に訴えました。「こんなに悪いことをしているのに、どうして何も裁かれないのですか？」このように祈りました。そして、主から答えがありました。「これから裁くよ。」意外にあっさり答えが来てハバククは驚きました。「けれども、あなたはその答えが信じられないだろう。」と言われます。バビロンがユダを襲うことによって、裁きを下すと言われたのです。これは、どうしてもハバククには受け入れがたいことでした。ユダは悪者ですが、バビロンはユダとは比べ物にならないほどの悪

者です。悪い者たちを裁かれるのに、もっと悪いものを使って裁くなんて、どういうことなのか？と問いました。

次から言う例えは、一般の方が聞かれたら、とても怒ることかもしれません。けれども、ここでのハバククの思いを日本の状況に合わせるなら、「神は日本人の悪事を、原爆を用いられて裁かれた」ということです。原爆を無くす、そうした平和主義が善であると信じている私たちにとって、もし神がそのようなことを言われたら非常に腹を立てると思います。しかし、神が悪を罰するために、他の悪をもって罰するということがある、ということです。

それでハバククは、見張り台にいて、主がいったい何をされるのを見ようと言いました。さっぱり分からないので、主がされることを眺めることしかできませんでした。すると主は、「義人は信仰によって生きる」と宣言されて、バビロンに対する徹底的な裁きを宣言されました。したがって、神はバビロンをユダを裁くために用いられましたが、そのことによってバビロンを正当化しません。むしろ、バビロンが行った悪については、神は裁かれます。

そこでハバククは喜ぶのです。それがハバクク書 3 章 17 節以降に書いてあるので読んでみたいと思います。「17 そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は困いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。18 しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。19 私の主、神は、私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる。」ユダの土地には、すでに飢饉が始まっていました。神の裁きが飢饉によって始まっていました。しかし、そのようにユダが暗部の中に入っているような時に、ハバククは、「主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう」と言っているのです。

これは、驚きですね。これを、信仰を持っていない人が見るならば、気が狂っているとしか思えないかもしれないし、あるいは酷い奴だと思えます。ユダの飢饉を見て喜んでいるのですから。しかし、彼が喜んでいるのは、主の中にある希望であります。バビロンが滅ぼされる後に見える希望を見たからです。だから、厳しい裁きという冬のような季節を通らなければいけないけれども、最後にはバビロンが滅ぼされるという春を期待することができます。だから、今から、まだ闇の中にいるのに主にあって喜ぶことができるのです。次に来る楽しみを思っ、喜びを先取りすることができるのです。主は決して私たちを見捨てません。見捨てているように見えたとしても、実は主が私たちを支えておられます。

パウロにとって、エルサレムでの宣教の失敗はローマへの宣教の始まりでした。エレミヤにとって祈りが聞かれないのは、神が新しい時代にイスラエルを植えられることの始まりでした。そして詩篇 77 篇の筆者にとっても同じです。神は、私たちの状況がよくなっていない時でも、次の幕を用意しておられます。「ローマ 8:28 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」